

<翻訳>ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと言語の世界

イアン・F・マクニーリー（講演）／石田文子（訳）

I

認知科学者スティーヴン・ピンカーの言葉を拝借して、言葉は「思考の素材、であると仮定しよう¹⁾。ならば、異なる言語を話す人々は思考の方法も異なるのだろうか？ たとえば英語や日本語に固有の思考のくせはあるのだろうか？ 異なる言語を話す人々は、異なるレンズを通して自然や社会や精神的な世界をながめるのだろうか？ もしも言語によって人々が別々の精神世界に隔離されているなら、そもそも翻訳や異文化間のコミュニケーションは可能だろうか？ もしかしたら言語能力は普遍的なもので、違いはないのかもしれない。だとしたら、言語の研究によって全人類に共通の精神構造を発見することはできるだろうか？

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトはドイツの言語学者で外交官でもあり、教育制度の改革者でもあったが、上記のような問題を人文科学研究の中心に据えた。つまり、言語を使って人間の精神について研究し、文化の違いを解明しようとしたのだ。1767年に生まれ1835年に亡くなったフンボルトは、カントやヘーゲルといった哲学者たちと同時代を生き、ゲーテやシラーのような文豪の友人であった。弟のアレクサンダー・フォン・フンボルトは19世紀初頭において、もっとも影響力のある知識人の一人だった。

ノーム・チョムスキーをはじめとする人々から、言語学のすぐれた理論家と認められているフンボルトは²⁾、いっぽうで根気強い経験主義的な研究者でもあった。ヨーロッパの植民地が拡張するにつれ、世界の言語を系統的に知ることがはじめて可能になった時代、フンボルトは言語と文化を真にグローバルなスケールで調査する研究者集団の中心にいた。1800年代初頭から1835年に亡くなるまで、フンボルトは政治家として、あるいは貴顕紳士としてのコネを使い、自らに情報をもたらしてくれる巨大な通信ネットワークを築いた。そのネットワークには6つの大陸に散らばった宣教師や商人、外交官、植民地行政官、探検家、学者仲間などが含まれていた³⁾。フンボルトはケチュア語の単語リストを集め、サンスクリット語の文法を学び、ジャワ語の叙事詩を熟読し、マラガシ語の聖書の一節を吟味し、エジプトのヒエログリフや中国の漢字の専門家と手紙をやりとりした。ちなみに日本語についてはどうだったか？ フンボルトはドイツに居ながらにして、メキシコから輸入した日本語の入門書をかじっていた。その本は、鎖国政策によって日本から追い出されメキシコに渡った失意のイエズス会宣教師の手になるものであった⁴⁾。

フンボルトはベルリン郊外にある豪邸でこれらの資料に囲まれ、飾り気のない木の机に向かっていた。ギリシャ彫刻が所狭しと並び、頭脳を刺激する緑色に塗られたその部屋で、フンボルトは想像の旅に出かけた。それは弟のアレクサンダーが行った実際の旅に負けにくいくらい野心

的な旅であった。アレクサンダーは博物学者、あるいは自然科学者として旅をし、コロンブスにつぐ「第2のアメリカの発見者」として有名になった。対照的にヴィルヘルムのほうは自宅の書齋から離れることなく、ニューイングランドからアンデス山脈までアメリカ先住民の足跡をたどり、東アフリカからイースター島まで先史時代の船乗りたちの航海に同行し、時間をさかのぼってバガバッドギターにひそむ古代の思想を探った。もちろん、スペイン北部のバスク地方で実地調査を行ったこともある。また、同時代のハワイ人に「アロハ」という言葉にはどれくらい異なる発音の仕方があるのかたずねたこともある⁵⁾。しかしヴィルヘルム・フォン・フンボルトの行った調査のほとんどは、ひとりきりの心の旅だった。新しい言語に出会うたびに、フンボルトはその言語の本質を成す認知構造を抽出しようとした。フンボルトはそれを「内的形式」と呼び、それは各言語の文法体系によって明らかになるため、家に居ながらにして解明することができた。

ひとりであることが多かったとはいえ、フンボルトはけっしてひとりで研究していたわけではない。貴顕紳士にして学者のフンボルトは世界に広がるアマチュア学者のネットワークに所属していた。それはフンボルトと同じように教養のあるヨーロッパ人のネットワークで、世界中に散らばりながら、全員が紳士的な振る舞いと作法にのっとり手紙のやりとりによって結ばれていた。さらにフンボルトは世界初の研究大学であるベルリン大学の創設者として、新しく出現した本職の学者たちを後援していた。そういうプロの学者たちは大学やアカデミーに雇われ、専門分野の研究に集中することによって身を立てるようになっていった。

フンボルトは世界の歴史からみると、ほんのつかの間の魅力的な瞬間、すなわち知のグローバル化のシステムが学問の専門化によって作り変えられる直前の時代を生きていた。つまり、ヨーロッパ人が全世界の知識——世界中の言語や地形や文化など——を獲得しはじめるにつれ、そういった知識の追求が、様々な、しばしば対立する専門分野に分裂していった時期である。ベルリン大学でも、そしてベルリンをまねようとしたボストンから北京にいたる各地の大学でも、フンボルトがまたにかけていた様々な専門分野——言語学、文学、古典学、人類学、歴史学、哲学など——が別々に発展しはじめていた。フンボルトにとってもっとも皮肉な巡り合わせは、彼の研究がその包括的な野心のおかげで、プロの学者集団から誤解される運命にあったことであり、しかもその学者集団はフンボルトが尽力してこの世に産み出したものであったことだ。

私が本日の講義で論じたい事柄は、学問の専門分野の出現によって知の生産の状況が変わる前の時代、世界の言語はどのように研究されていたかについてだ。そのために、ひとつの事例に焦点をあてたい。それは、今日オーストロネシア語族として知られている大きな語族がアジアの南の海洋地域を支配していることをフンボルトが示した事例である。フンボルト以外の紳士学者たちがこの研究テーマをどうやって開拓したのか、フンボルト自身はなぜこのテーマに取りかかったのか、フンボルトはなにを発見したのか、そしてその発見はなぜ彼が引き立てたプロの学者たちから誤解されたのかを説明したい。

そうすることによって、我々が今日あたりまえのものとして受け入れている学問の専門分化が始まったとき、いかに多くのものが失われたかが明らかになるだろう。たとえば、学問研究において世界的な視野や野心が失われたし、世界とその文化についての知の生産にアマチュア学者は関与できなくなった。冒頭で私が発したような疑問に我々が答えようとするならば、お

そらくフンボルトの研究が、そのグローバルな視野と包括的な野心をもって手を差し伸べ、我々が失ったものを回復し、前進する方法を教えてくれるだろう。

II

オーストロネシア語族は地理的な分布からみると世界で2番目に大きな語族で、地球上のどの語族より多くの言語を含んでいる。おそらく、人類が使用しているおよそ6,000の言語の5分の1がそこに含まれるだろう。それらの言語のうち、ジャワ語とタガログ語とマレー語が現代ではもっとも話者人口が多く、インドネシア、フィリピン、マレーシアにその多くが集まっている。しかし先史時代にはすでに、オーストロネシア諸語の話者が西はマダガスカルから東はイースター島まで広がっていた。信じがたいほどすばらしい操船技術によって、これら古代の船乗りたちはアフリカの東からアメリカ大陸まで広がる熱帯の海洋地域のほとんどに入植していたのだ。今日の言語学者たちは、この語族のふるさとが台湾であることを突きとめている⁶⁾。オーストロネシア語族の十の語派のうち、九つは台湾内部にとどまり、1600年代に中国人が入植する以前の先住民の言語として存在した。そのほかのすべての言語——総数にして1,100以上ある言語——は十番目の語派から生まれ、マレー・ポリネシア語族と呼ばれる⁷⁾。その話者はまず5,000～6,000年前に台湾を出て、島伝いに移動しながら、インド洋と太平洋を越え、最終的に西暦500年ごろにハワイ諸島に到達した。

こういった事柄はフンボルトの時代には知られていなかった。しかしヨーロッパの領土拡張の時代に地球規模の視野と生まれながらの好奇心をもった紳士学者が次々と現れ、様々な見解をまとめはじめた。1600年代にはすでに、オランダの探検家たちが南の海に広く散らばっていくつもの言語のあいだの類似に気づきはじめた。そして1782年、イギリス東インド会社の職員ウィリアム・マーズデンがこれらの類似は偶然ではありえないことを論証した。マーズデンは異なる言語で似かよった発音と意味をもつ単語のリストを表にまとめた。たとえばタヒチ語の *aheetoo* とマラガシ語の *pheetoo* はどちらも「7」を意味する⁸⁾。

単語の比較は1800年代初頭まで言語の関係を研究するための主な方法だった。なぜなら当時利用できた初歩的な辞書を使って簡単に調べることができたからだ。これから述べるように、その後数十年たってようやく、文法構造の比較によって、語彙における偶然の類似に基づいた軽率な判断が避けられるようになった。文法の分析はのちに、言語の系統樹を作成し、時をさかのぼって共通の源を探るためにも使われた。そのようなツールをもたなかったマーズデンはマレー・ポリネシア語族の起源について推測するしかなかった。マーズデンには中央アジアがもっともそれらしい候補に思えたが、その理由は中央アジアが偉大なる「民族の揺籃の地」と考えられていたからにすぎなかった⁹⁾。

マーズデンのマレー・ポリネシア語族に関する初期の研究結果が発表されてからわずか4年後、もうひとりの紳士学者がべつの大きな語族を発見した。1786年、東インド会社の職員でカルカットの裁判官でもあったウィリアム・ジョーンズは、よく知られているように、古代ギリシャ語とラテン語、サンスクリット語、ペルシャ語、ケルト語、ゴート語、及びそれらから派生したすべての言語のあいだの驚くべき類似性を指摘した。我々が今日インド・ヨーロッパ語族と呼

んでいる言語グループは、インドからアイルランド、さらにはヨーロッパの海外植民地にまで及んでいる。それは人口面でも地理的分布の面でも世界で最大の語族だ。ジョーンズの発見から発展したインド・ヨーロッパ語族の研究が、学問的な専門分野としての言語学の隆盛に火をつけた。とくにドイツではそれが著しく、その結果、インド・ヨーロッパ語系民族あるいは「アーリア人種」の起源や特別な資質についてのいいかげんな憶測も数多く生じるようになった。

1780年代にほぼ同時にふたつの大きな語族が発見されたことによって、そのふたつがどんな関係にあるのかという問題が提起された。その問題を50年後に長大な未完の研究のなかで解明したのがフンボルトであった。しかしその前に、そもそもマレー・ポリネシア語族の諸語はどうやってたがいに近い関係になったのかについて、もうひとりの東インド会社職員、ジョン・クロフアードが非常に興味深い説を提示した。クロフアードは医師であり、のちに植民地の行政官になったが、世界をまたにかけるその職業のおかげで、イギリスとインド洋にあるイギリス植民地のあいだを何度も行き来した。クロフアードの3巻組の著作『インド諸島史 (History of the Indian Archipelago)』は1820年に出版されたが、それはジャンルでいえば、いくつもの学問分野にまたがる文化史に属する本だった¹⁰⁾。それより9年早く出版されたマーズデンの『スマトラ史 (History of Sumatra)』と同じく¹¹⁾、クロフアードの著作は言語や文学とともに歴史、技術、宗教、社会、その他のテーマを取り上げている。インドネシアの文学についてクロフアードは「大げさで幼稚でひどくばかばかしい……まるで幼児の吃音」以外のなものでもないとしている¹²⁾。そのような偏見はヨーロッパの紳士学者に典型的なものであった。しかしクロフアードは言語そのものについてはもっと好意的な意見をもっていた。ここで彼は文明の波及が単純なプロセス、すなわち単語の伝播によってたどることができると認めたのだ。

クロフアードはマレー・ポリネシア諸語を話す人々が民族的にも言語的にもひとつの起源をもっているとはみなさなかった。そのかわりにクロフアードはこう考えた。先史時代、点在するインドネシアの部族はそれぞれ独自の言語を発達させたが、どれも語彙は不十分なままだった。その後、ある地域の部族——クロフアードはそれをジャワ島の部族であるとした——が文明の域に達し、武力による征服や平和的な交渉を織り交ぜて周辺の部族を支配していくようになった。彼らの使う古いジャワ島の言語——それをクロフアードは「大ポリネシア語」と呼んだ——は、数や動植物や金属などを表す単語を通して、周辺部族の言語に優れた技術や抽象化を可能にする概念を吹きこんだ。大ポリネシア語の拡散こそ、マーズデン以降の学者たちが指摘してきた類似のすべてを説明するというわけだ。やがてさらなる外部からの影響の波及が何度も打ち寄せてきて、新たな、より洗練された単語がこの地域にもたらされた。サンスクリット語から抽象名詞や神話が、アラビア語から宗教や法律の用語が、ポルトガル語やオランダ語や英語からは商業や科学の概念が入ってきた¹³⁾。

フンボルトはクロフアードの理論にはほとんど価値を見出さなかった。なぜならそれは単語の伝播に焦点をあて、単語と概念を同等にみなし、もっと重要な文法的な関連を無視していたからだ。しかしクロフアードが描いてみせたインドネシアの民族の複雑さは、フンボルトが晩年をインドネシアの言語の研究に費やすきっかけを与えた。

しかしまずはここで、この地域を研究していた紳士学者たちの例から、知のグローバル化に

ついて一般的にはどういうことがいえるのかを手短かに述べておきたい。マーズデンやジョーンズやクローファードのような学者たちは、世界の言語の多様性を把握するにあたって、驚くほど広範囲ながら、結局は浅薄な能力しかもっていないことを示した。彼らは学者としての仕事と役人としての仕事を自在に行き来できる特権を享受していた。そのおかげで知の生産が可能な人々の範囲が広がり、知識が生み出される源が大幅に増えた。しかしこれらの本職ではない学者たちは、自分たちの本来の仕事の実利的な目的からけっして完全に逃れることができなかった。彼らが言語を習得したのは植民地を作るためであり、支配するためであり、非ヨーロッパ人を改宗させるためであって、言語の研究そのものに専念するためではなかった。ではここでフンボルトに視線を戻し、ヨーロッパの世界進出のおかげで学問のための学問もまた支えられたこと、それがいかにして可能だったかということについてざっとみていくことにしよう。

III

フンボルトがマレー・ポリネシア諸語の研究に取りかかったのは、その地域に直接的な縁のあった人々とはまったく違うルートを通じてのことだった。世界的な変革と紛争の時代であった当時、ヨーロッパの国々の外交と国際関係にとって、言語はもっとも重要であった。そのおかげで、ヨーロッパと北アメリカの政治の中核で、純粋に学問的な企てが奨励されるという思わぬ効用が生じた。フンボルト自身、ローマやウィーンやロンドンで大使を務め、そのそれぞれの地で、世界の様々な言語の専門家と個人的な親交を結んだ。そういった専門家たちの力を借りて、フンボルトは1810年代と20年代に、実質的に全世界の言語を調査することができた。フンボルトは地域ごとに、それぞれの言語が明瞭な思考や創造的な表現を容易にするかどうかという点で評価を行った。この作業の終わりに、マレー・ポリネシア語族の領域が、フンボルトの頭のなかの地図上で、いちばん大きな空白として浮かび上がってきたのだ。それはフンボルトのより包括的な精神に関する理論の可否を判断する試金石となった。

フンボルトの地図で優位を占めていたのはインド・ヨーロッパ語族の言語だった。インド・ヨーロッパ語族はサンスクリット語族という名でも知られているが、それはその古代インドの聖なる言葉が、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、その他すべての言語の源であるという理論に基づいている¹⁴⁾。

フンボルトがはじめてサンスクリット語に興味をもったのは1810年代後半、ロンドンにいたときのことで、ロンドンではイギリスのインド支配のおかげで、サンスクリット語研究の中心地であった。フンボルトはそこでふたりのドイツ人との親交を通じて、サンスクリット語の文法と文学の傑作に精通するようになった。そのふたりのドイツ人のうちひとりとは同じくロンドンにいたフランツ・ボップで、もうひとりとはフランスで活動していたA.W. シュレーゲルだ。フンボルトはドイツに戻ったとき、自ら尽力してそのふたりを教授として招いた¹⁵⁾。ボップやシュレーゲルをはじめ、この世代にはサンスクリット語にのぼせあがった者たちが大勢いた。しかしフンボルトはシュレーゲルの弟のフリードリッヒが好んで主張した「サンスクリット語は神から古代のインド・ヨーロッパ語系民族に与えられた言語である」というような考え¹⁶⁾は退けた。そしてもちろん、サンスクリット語がアーリア人種の根源的な優越性を示すということも信じ

ていなかった。フンボルトは言語学を古代の文化を再現するための道具とはみなしておらず、それによって西洋文明を蘇生させようとか、ドイツ国民を覚醒させようとかいう発想もなかった¹⁷⁾。しかしフンボルトはほとんどの言語学者と同様に、インド・ヨーロッパ語族の諸語は屈折を特徴とする文法のゆえに優れていると考えていた。

屈折言語では名詞や動詞の内部で音を変化させて、単数か複数か、主語か目的語か、男性名詞か女性名詞か、過去か現在かなどを示す。フンボルトの考えでは、インド・ヨーロッパ語族における屈折のルールが、その話者に並はずれて素早く自然な知的活動を可能にさせている。つまり、言語そのものにもともと備わった特質によって、複雑に入り組んだ概念を組み立てることができ、よどみなく話すことができるというわけだ。それは正確な屈折形がそれぞれの単語に適切な意味を即座に与え、文中の他の単語との文法的な関係を明確にするからだ。屈折のおかげで文脈や仮説から推測する必要がなくなり、安定した文法構造のなかでひじょうに想像力に富んだ表現が後押しされるため、精神は解放されて飛躍する¹⁸⁾。

フンボルトのこのような精神理論の中核にあるのは次のような信念であった。すなわち、もっとも完全な言語は、発話される音声という生の素材に、フンボルトが「形式」と呼ぶものを課す。屈折は素材に形式を与えるのに役立つ。動詞はとくに動作や活動を示す言葉だから、より不活性な名詞とはきちんと区別されなくてはならない。フンボルトによれば、インド・ヨーロッパ語族における屈折の法則は、とくにこれをうまくやっているという¹⁹⁾。

もしフンボルトがインド・ヨーロッパ語族の世界にとどまっていたら、言語学者として名をあげることはなかったかもしれない。しかし1799年という早い段階で、スペイン北部のバスク地方へ先駆的な旅をしたおかげで、フンボルトのなかに「未開の、言語に対する新奇なあこがれが芽ばえた。未開の言語とは、古典の伝統や書き言葉による文学がなく、インド・ヨーロッパ語族とはまったく関係のない言葉である。このあこがれや、そこから必然的に生じる、一見野蛮な文盲の人々への深い関与こそが、フンボルトを同時代の熱心な言語学者の多くから抜きん出た存在にしたのだ。そのあこがれによって、のちにフンボルトは南北アメリカ大陸の研究に乗り出した。アメリカ先住民の言語は、地球上のどの言語からも独立した一群の「未開の、言語だった。

アメリカ先住民の言語に関するフンボルトの研究は、ローマのバチカン図書館の司書ロレンソ・エルバス・イ・パンドウロによって可能となった。エルバスは1770年代のイエズス会に対する弾圧のあとヨーロッパに帰ってきたカトリックの宣教師たちから、膨大な資料を収集していた²⁰⁾。1803年から1808年までプロシアの大使としてバチカンにいたフンボルトは、エルバスから多くの貴重な文典や辞書の提供を受けた。それに加えて弟アレクサンダーがラテンアメリカの探検から持ち帰った資料や、自身の通信ネットワークからもたらされる情報もあった。そういった追加資料のおかげで、フンボルトは宣教師たちからの情報にとらわれずにすんだ。宣教師たちは最初にアメリカ先住民の言葉を学んだが、ラテン語の文法に基づいて分類や推測を行っていた。フンボルトはアメリカ先住民の言語の文法を、その言語に固有のものとして分析した最初の人物になった。

フンボルトはアメリカ先住民の言語を、屈折語より劣ったものとして別のカテゴリーに分類した。それは従来「膠着語」と呼ばれていたカテゴリーだった。膠着語では単語の内部の音を

変化させて微妙な文法的差違を示すのではなく、複数の単語や単語の断片をくっつけてべつの単語が形成される。こういった合成あるいは接着の法則は、屈折語が可能にする頭の回転の速さ、思考の厳密さを阻害するとされた。なぜならそれは話し言葉では別々に切り離されているはずの概念をいっしょくたにしてしまうからだ。

アメリカ先住民の言語に対するフンボルトの否定的な評価はヨーロッパ系アメリカ人の言語学者たちから批判を招いた。彼らはフンボルトのバスク語の現地調査に触発されて自らアメリカ先住民の言語の研究に着手した者たちだった。P. S. デュボンソーはフィラデルフィアの弁護士でアメリカ哲学協会の会長だったが、アメリカ先住民の言語を擁護して、それらの言語では、創意工夫に富んだ方法で単語の断片を寄せ集めたり入れ替えたりすることができるのと述べている。デュボンソーによると、たとえばデラウェア語の *kuligatschis* という言葉は「そのかわいらしい（猫の）前足でお手をして」という意味で、まるまるひとつの文章に相当するくらいの意味が、想像力を刺激するたったひとつの単語のなかに凝縮されているのである²¹⁾。しかしフンボルトにいわせると、そのような膠着語はいくら魅力的でも、けっして明快で厳密な思考を産み出すことはできない、となった。そういった明快さや厳密さをもっと正確な内的形式の法則をもつ言語に見出すことができるというのだ²²⁾。

このような考えはアメリカ先住民に対するヨーロッパ人の一般的偏見をなぞったものにすぎないが、いっぽうでフンボルトはどんな言語でもこの上なく微妙で洗練された思考が可能だと強調している。ただアメリカ先住民の言語のように、そういったことが他の言語よりやりやすいものもある、と。

中国の言語において、フンボルトは第3の類型、孤立語に遭遇した。中国語は単語の音の変化で文法的な関係を示したり、単語同士をくっつけて複雑な意味を作ったりしない。ひとつの概念を、ひとつの変更できない単語のなかに閉じこめて、語の順序だけでそれぞれの概念がたがいにどう関連しているのか示すのだ。その極端なまでに単純な形式をみれば、中国語はフンボルトの理論によって、世界でももっとも原始的な言語のひとつにみなされるべきであった。しかしここでフンボルトは世界でもっとも歴史あるもっとも豊かな文学や哲学の伝統、否定しがたい言語的成果に直面した。

結局、ヨーロッパ随一の中国学者ジャン＝ピエール・アベル＝レミュザとの手紙のやりとりを通じて、フンボルトは自らの説を修正せざるを得なくなった²³⁾。アベル＝レミュザはパリのアジア協会の創始者で、中国を世界でもっとも文明の発達した社会のひとつとみなすヨーロッパ人の古い伝統を受け継いでいた。漢方の教本を使って中国語を独学したレミュザは、諸外国語に通じた頼りになる人物だった。

レミュザにならって、フンボルトも中国語をひじょうに洗練された言葉として賞賛するようになった。その理由はまさしく、ひとつひとつの単語が侵すことのできない概念を示しているからだという。屈折語では豊富な音標識が精神の負荷を軽減するのに対して、そのような標識がない中国語では、個々の単語が合わさって全体としてどのような意味の複雑な思考を表しているのか、沈黙考しなければならぬ。中国語で考えるのは屈折語で考えるよりも明敏さや厳密さに欠けるかもしれないが、より抽象的で深遠で複合的な解釈に適している。つまり中国語は純粋な思想の言語なのだ²⁴⁾。

いったいなぜ中国語はそんなふうになったのか？ フンボルトの推測によると、中国語に屈折がないのは、使える音のレパートリーが限られていたせいであり、この音声面の貧困は、中国の住民が歴史的に単一で安定していた結果だという。何世紀にもわたって中国は住民の移動や異なる言語の混じり合いなど、音のレパートリーを豊富にする出来事を免れてきた²⁵⁾。通常ならフンボルトは文化の交配をよしとするが、ここでは中国語が自らの孤立を長所に変えたと認めた。いっぽうで、中国語自体が中国文化の歴史的な統一と安定に貢献してきた。

屈折語から膠着語、孤立語まで、フンボルトの考えでは、それぞれの言語類型は、それぞれの話者の思考や表現の独特のくせを助長するものだった。残された課題は、この理論を新しいテストケースにあてはめ、さらに精緻なものにすることだった。そのために必要とされたのは、中国語とインド・ヨーロッパ語族という両極端の中間にあたる言語グループで、なおかつアメリカ先住民の言語のように他から完全に切り離されていないものであった。マレー・ポリネシア諸語は、文化と住民が交錯する地球の十字路に存在する。すでによく知られているが、まだ十分に研究されてはおらず、フンボルトの求める条件にぴったりあてはまった。

IV

マレー・ポリネシア語族の研究におけるフンボルトの貢献は、簡単に要約することができる。まずフンボルトはインドネシアにおけるインドの影響について、多くの学問分野にまたがる文化史を著した。そのなかでフンボルトはサンスクリット語とパーリ語、ヒンズー教と仏教を取り上げ、インドの文学、神話、記念碑建築などの様々な側面を論じた。次にフンボルトはカヴィ語という中世のジャワ島の詩趣に富んだ言語に焦点をあてた。カヴィ語はサンスクリット語から大量の単語を取り入れながら、インド・ヨーロッパ語族とは異なる文法構造を保っていた。したがってカヴィ語はインド・ヨーロッパ語族とは別のマレー・ポリネシア語族に属するという事になった。その次にフンボルトはカヴィ語以外のたくさんのマレー・ポリネシア諸語の文法を比較して、それらが親縁関係にあることを証明した。その証明は何百ページにもわたり、動詞、名詞、代名詞、数を表す語の綿密な分析が、マラガシ語、マレー語、ジャワ語、ブギス語、トンガ語、タガログ語、マオリ語、タヒチ語、ハワイ語に関して行われている。ちなみにフンボルトはそこに台湾語を含めるのを怠っていた。台湾の言語とマレー・ポリネシア諸語との関係は、ある学者によってすでに示唆されていて、フンボルトはその学者のために教授の職を確保してやるくらいよく知っていたにもかかわらず²⁶⁾。

この壮大な研究は、たくさんのひじょうに興味深い問題を提起している。地球の裏側にしか話者がいない言語をいったいどうやって学ぶことができるのか？ そういった言語にはおそらくちゃんとした辞書も文法書もなく、よりどころとなる文書も現地にさへほとんどないだろう。万一それらの障害を克服できたとしても、いったいどうやって異なる言語の親縁関係を、現在だけでなく数百年も昔にまでさかのぼって再構できるのか？ さらに、特定の言語や語族に特徴的な考え方、感じ方のくせについて、どうやって結論を導くのか？

このような問題は、フンボルトが自らに課した課題であり、彼より前の学者たちはけっして直面しなかった課題である。マーズデンやクロウファードのような紳士学者たちは、マレー・

ポリネシア語族の言語に直接触れることができたが、それについて、推測の域を出ない表面的な理論しか提示できなかつた。中国語やサンスクリット語の専門家は、文法や文学に関して、もっと深い系統的な知識をもっていたが、アジアのもっとも洗練された文化からヨーロッパにもちこまれた原典に盲目的に依存していた。マレー・ポリネシア語族を研究するために、フンボルトは自らの通信ネットワークを、いままでだれもやったことがないような形で利用しなければならなかつた。

マラガシ語を例としてみてみよう。マラガシ語はマダガスカルと言語で、マレー・ポリネシア語族のなかでもっとも西に存在するきわめて重要な言語だつた。フンボルトはマラガシ語を学ぶために、キリスト教に改宗した先住民のために作られたマタイの福音書の抄訳を使用した。例によって、その抄訳を手に入れるだけでもかなりの努力が必要だつた。まず、フンボルトがロンドンにいたときの知り合いのイギリス人外交官が、モーリシャスにいる同僚からそれを手に入れた。その外交官は、フンボルトの後任としてロンドンにいたプロシア大使（フンボルトの娘婿でもある）を通じてその抄訳をベルリンに送った²⁷⁾。フンボルトはそのマラガシ語の福音書を繰り返し読み、やがていくつかのパターンを把握した。たとえばある種の接尾辞は受動態を表しているように思えた²⁸⁾。フンボルトはそれらの推測を書きとめて大量の質問をマダガスカルにいるプロテスタントの宣教師ジョーゼフ・ジョン・フリーマンに送った。それから1年以上たつて、ようやくフリーマンは返事を寄こした。そこには詳しい答えと、もっと早く返答しなかつたことについてのくどくどしい弁解が書かれていた。「怠慢のそしりを受けることはもちろん、怠慢だつたと思われることすら、なんとしても避けたいのです」フリーマンはそう弁明している²⁹⁾。たったひとりで過剰な労働に従事している宣教師が、はるか遠くのドイツの男爵から勝手に手紙を送りつけられただけで、そこまでいうのだ。フリーマンはもちろん、フンボルトがひじょうに専門的な質問をしてきた背景にどのような壮大なプロジェクトがあるか、ほとんど知らなかつた。それでも紳士としての礼節という厳格な規範にのっとり、一度も会つたことがなく、今後も会うことはないだろう人物に返事を書かねばならなかつたのだ。

カヴィ語に話を戻そう。サンスクリット語とジャワ語のハイブリッドであるこの言語は、フンボルトの研究の中心になるのだが、フンボルトは単に外国語を遠方から学んだだけではない。その言語の親縁関係を何世紀もさかのぼつて、ほとんどその起源まで再構したのだ。カヴィ語についてのフンボルトの論述の中心には、中世から伝わるジャワ島の国民的叙事詩『バラタユダ』の分析がある。その詩がふたつの一族の闘争を描き、クリシュナという名の人物が登場することを知れば、それがサンスクリット語の大叙事詩『マハーバーラタ』に由来することはだれでもわかるだろう。したがってそれはジャワの中世の言葉が同様にインドに由来することを示しているように思われる。それはジョン・クローファードが単語の伝播の理論で示唆したことと符合していた。しかしヨーロッパではだれひとりとして『バラタユダ』の完本をもっていなかつた。そしてフンボルトの時代にはカヴィ語を完全に使いこなすことができる人物は、ジャワ人の王族男子ひとりしか存在していなかつた³⁰⁾。そこでフンボルトはクローファードに頼つた。クローファードは1830年代初頭にはそういった研究から遠ざかつて10年以上たつていたが、フンボルトがもっと多くのカヴィ語の原典を手に入れることができるよう喜んで手助けした³¹⁾。こうして様々な資料を手にしたフンボルトは、『バラタユダ』のなかに数多くみられるサンスク

リット語からの借用語について、系統立った分析を行った。その結果、それらの借用語はサンスクリット語の法則ではなく、べつの法則、つまりカヴィ語独自の文法に従っていることがわかった。しかもその文法は他のマレー・ポリネシア語の文法と似ていた。このことから、マレー・ポリネシア語族の独立性が、歴史的にインド・ヨーロッパ語族とひじょうに密接な接触があった場所においても確認されたのだ³²⁾。

フンボルトのすばらしい業績のひとつとして、母語話者が無意識に身につけている思考のくせを支配する言語法則の発見があげられる。ジャワ語の動詞についての研究がそのいい例だ。1831年、フンボルトは何人ものオランダ人宣教師に、ジャワ語の動詞はどうやったら名詞に転換できるかを尋ねた³³⁾。宣教師のひとり、最初の子音を変化させるのだと述べた。たとえば「食べる」を意味する *neda* という動詞はその方法で「食べ物」を意味する名詞 *teda* になる。しかしフンボルトは歴史的にその転換は逆向きに行われたことを示した。つまり動詞はもともと名詞から作られたのであり、*teda* が *neda* になったのだ。それに関してフンボルトは次のように論証した。動詞はすべて *n* や *m* などの鼻音から始まるので、もとなる言葉ではなく、ほかから派生したものにちがいない³⁴⁾。ある種の子音を使って名詞から動詞を作る言語法則があって、その法則はジャワ語の話者の頭のなかで無意識に作動しているのだ、と。

マレー・ポリネシア語族は名詞を語根として使うことが多いのに対して、インド・ヨーロッパ語族は動詞を語根として使うことが多い。このことを示すことによって、フンボルトはこのふたつの語族のあいだのもうひとつの相違点を見つけた。それはより深い知的作用の違いに焦点をあてたものだった。フンボルトの考えでは、マレー・ポリネシア諸語には、力強さや知的活力が欠けている。そういった性質は、名詞とはあきらかに異なる動詞を語根とすることから生じるからだ。また、マレー・ポリネシア諸語はインド・ヨーロッパ諸語のように、屈折によって正確さや活力を獲得することはなく、かといって「中国語のように、軽蔑と諦観の念をもって文法構造を拒絶するでもない」。そのかわりに名詞や動詞の形態を、「世にも不思議な」「偏った」やり方で、行き当たりばつりに混ぜ合わせている³⁵⁾。こうしてマレー・ポリネシア諸語は、屈折語と孤立語という両極端の言語の中間の位置を占めることになった。さらに、このことから、マレー・ポリネシア諸語は、フンボルトの打ち立てた類型論において、同じように体系化が不十分とされたアメリカ先住民の言語と同列に置かれた。しかし、ここでいちばん重要なことは序列を決めるのではなく、人類の言語と文化の多様性を、その具体例を網羅する形で精密に描き出すことであった。

これらの例はフンボルトの仕事ぶりについて、ほんの表面をなぞったものにすぎない。フンボルトは想像力と系統的な修練を融合させながら、外国の原典をくる日もくる日もながめていた。そうすることによって、やがて屈折や膠着のパターンが脳裏にちらつきはじめ、それぞれの言語に内的形式を与える法則が垣間見えたのだが、その詳細については私もまだ再現できていない。しかしこうはいえるだろう。フンボルトは遠方の植民地にいる紳士学者とヨーロッパで研究している大学の言語学者がそれぞれに成し得たことの最良の成果を合体させたのだ。同時代人のなかではほとんど例外的に、フンボルトだけが地球規模の広がりや学問的な深さの対立をやわらげることができた——しかしそれもほんの一瞬のことであった。このあとみるように、フンボルトの業績は未完成ではかないものであり、その業績をいちばん評価していいはず

の人々にも理解されなかった。

V

「私は悲しくて容易ならぬ義務を背負いこんだ」アレクサンダー・フォン・フンボルトは兄の未完の大作に寄せた序文にこうしたためた。それはカヴィ語の研究として発表されながら、さらに大きな野心を示す副題「人類の言語構造の相違とそれが文化の発達に及ぼす影響について」³⁶⁾がついていた。しかしヴィルヘルムはその大著を完成する前に亡くなった。彼は気難しい作者で出版にも乗り気ではなく、冗長で仰々しい文体にとりつかれていた。多くの言語の達人でありながら、どの言語でも自分の考えを明瞭に表現できなかった。『カヴィ語研究 (Kawi-Werk)』として計画していた全三巻——総ページ数にして1,700ページ以上になる——のうち、第一巻のみがヴィルヘルム本人によって監修された。死後の出版のための残りの作業はヴィルヘルムの秘書で、自身もすぐれた言語学者であるエドゥアルト・ブッシュマンに託された。

編集作業における困難なきさつに加えて、『カヴィ語研究』はさらに大きな障害に直面した。それはドイツのもっとも著名な言語学者で、いまや言語学の創始者とみなされているフランツ・ボップの誤解に起因していた。ボップはすでに述べたように、1818年、ロンドンでフンボルトと出会い、直々にサンスクリット語を教えた間柄だ。ふたりはのちに親交を再開したが、それは1821年、フンボルトがボップをベルリン大学の教授職に斡旋したあとのことだった。

言語——とくに古代ギリシャ語とラテン語は、ドイツの教育においてもっとも重要な位置を占めていたが、それはフンボルトが行った教育制度改革のおかげでもあった。ボップの世代にドイツの大学は、西洋の古典研究からもっと広く世界の言語と文化を比較研究する方向へ決然として歩みはじめた。しかしそのような変化は異論を招き、ボップのような人物によって、つねに攻撃的に擁護されなければならなかった。

フンボルトの『カヴィ語研究』の第3巻が出版されて数ヶ月たったころ、ボップがマレー・ポリネシア語族に関する自説を発表した。そのなかでボップはマレー・ポリネシア語族をインド・ヨーロッパ語族から派生したグループとみなし、フンボルトを権威として引き合いに出していた。しかしそれはフンボルトの出した結論をまったく否定する行為だった。ボップは証拠もなしにこう述べている。マレー・ポリネシア諸語はサンスクリット語がインドネシアに伝わったあと、サンスクリット語の残骸から生まれたもので、ちょうどロマンス諸語——イタリア語、フランス語、スペイン語など——が西ヨーロッパでラテン語の残骸から生まれたのと似ている³⁷⁾。しかしマレー・ポリネシア諸語における自由放縦はロマンス諸語よりもずっと大きく、祖語の文法が完全に失われてしまった。ボップはフンボルトがマレー・ポリネシア語族の固有の文法体系と証明したものを、なんの体系もないとみなしたのだ。そのため、マレー・ポリネシア語族がサンスクリット語から生まれたという由来を証明するには、単語の比較に頼るしかないということになる。この巧妙な措置によって、ボップは自らの名声を確固たるものとした言語学的手法を適用することを免れた。およそまともな言語学者ならだれでも、文法の比較は欠かせないものと考えている。なぜなら、ほとんどどんな言語でもふたつ取り上げて比較してみれば、歴史的な関係があろうとなかろうと、同じような発音をする語がいくつかはみつかるからだ。インド・

ヨーロッパ語族のすべての言語を比較したポップの研究は、まさにそういった文法上の分析に基づいていた³⁸⁾。

それなのにポップはその方法を放棄してまで、広大なマレー・ポリネシア語族の世界を、すでに広大な自らのインド・ヨーロッパ語族の研究に付け加えようとした。音韻変化の法則に基づいた推測をたくさんの日常語にあてはめて、ポップはマレー・ポリネシア諸語にみられるそれらの単語の多くがサンスクリット語に由来しているとした。このようにして、とくに大胆な主張のなかでは、アイルランド語の lamh という語とハワイ語の lima という語がともに「火」を意味し、両方の由来をたどって同じサンスクリット語の lab という語に行きついたとしている³⁹⁾。もしポップが同じ手法を、たとえばアイルランド語とベンガル語に適用していたら、そうまずいことにはなっていなかったかもしれない。北西ヨーロッパの言語と東インドの言語が同じ起源をもつという驚くべき発見は、1786年のウィリアム・ジョーンズ以来、つねに学者たちに創造的刺激を与えてきた。フンボルトは苦心してそういった学者たちの熱狂を冷まし、マレー・ポリネシア諸語を独自のものとして扱おうとした。ポップはインド・ヨーロッパ語を話す古代アリア人の名誉を回復させることなどは夢にも思わなかった。その点ではフンボルトと同じである。しかし知的専門職として、絶えず自らの学問上のなわばりを可能な限り拡大しなければならなかった。フンボルトは本職の学者ではなかったため、競争精神を磨く必要はなかったのだ。

ポップの名声に加え、彼の誤った解釈が巧妙だったおかげで、その後の批評のトーンが定まった⁴⁰⁾。1841年、ベルリン大学の地理学の教授で人類史の学者でもあるアウグスト・ツォイネが、『カヴィ語研究』を賞賛する批評のなかで、ポップの言葉をときに一言一句そのまま引用し、その意見に追従した⁴¹⁾。これによって、フンボルトもマレー・ポリネシア諸語の起源はインド・ヨーロッパ語族にあると考えていたという誤った理解が本職の学者たちのあいだで定着した。この時点でフンボルトの秘書のブッシュマンはこれ以上の侮辱に耐えられなくなり、新聞紙上でポップを非難した。それによるとポップは「大風呂敷を広げたサンスクリット語中毒」で、ともに尊敬していたフンボルトの著作を故意に曲解し、自らの研究の宣伝に利用した⁴²⁾。これに対してポップは硬軟織り交ぜたたくみな論調でこう応じた。じっさいはブッシュマンこそ病的な願望に突き動かされ、フンボルトの遺産とマレー・ポリネシア語族を独り占めしようとした——そもそもブッシュマンがフンボルトの研究課題を引き継いだのは、自ら研究課題を打ち出す創造性に欠けていたからだ、と。驚くべきことに、この心理学的分析を加えた反論は、ブッシュマン本人への非難としてではなく、ポップ自身の論文に対する「自己批評」の形で行われた。ポップはその自己批評について、自らの斬新な結論をブッシュマンの偏った非難から守る試みだと説明した⁴³⁾。

ポップのへまがさらに皮肉だったのは、彼こそ同時代の言語学者のだれにも増して方法論上の厳格さを第一に掲げていたからだ。なぜなら方法論的厳格さによってこそ、言語学は文学や歴史学や文化研究や美学や哲学などから遮断されうるからだ。ポップの行動は学問分野が専門化した時代にはびこる学者の自己宣伝や競争のよい例を示している。時代と文化と制度の溝がポップやブッシュマンとフンボルトやその通信仲間たち——マーズデンやクロウファードやフリーマンなど——を隔てていた。古い世代の紳士学者たちは、この上なく礼儀正しく敬意をこ

めた論調で意見を交換しあった。その理由のひとつは、地球の裏側にいる孤独な仲間から情報を得るためには、相手の気分を害さないことがなによりも優先されたからだ。紳士の時代の学問もけって辛辣さや敵意や派閥と無縁だったわけではない。1840年代に変わったことは、新しく出現したプロの学者たちが、専門的方法論的な議論を個人的なけんかにしてしまったことだ。彼らはじっさいにしばしば専門的方法論的論争を通じて、個人的対立を極限まで深めていった。

フンボルトの研究が軽視や誤解の憂き目に遭ったのは、彼の書き方がまずく、出版に乗り気ではなく、あいまいで難しいテーマを取り上げ、しかも完成させる前に亡くなってしまったからなのか？ もちろん、そういったことが大きな要因となったことは疑いない。はっきりした文体、人目を引く発見、豊富な出版物、並みはずれた長寿といったものがどんな効果を生むか知りたければ、南米探検で華々しいキャリアの幕を切って落とした弟のアレクサンダーをみればいい。それでも、ヴィルヘルムにとって不利になった要因は、彼に続く他の言語学者たちが永続的な成功をおさめる障害にはならなかった。彼らの著作もフンボルトと同じように専門的で難しく、あいまいなものだったが、とくにドイツではそういうことは問題にならなかった。19世紀のドイツ人は古典文学から化学までの様々な分野で、経済的にずっと豊かだったイギリスやフランスの同時代人をしのいでいた。しかしなかでも言語学ほどドイツの成功が顕著だった分野はほかにないだろう。言語学においては、外国文化を研究するためのドイツ式の手法が、じっさいに海外植民地をもつ国々におけるよりも大きな学問的成果を生み出していた。ドイツの言語学者にとって、難解な本を書くのは欠点ではなく、誇るべきことだった。フンボルトが軽視されたのは彼が書いたものよりも、言語学そのものが変質したことと関係があった。

VI

今日、言語学は高度に専門化した学問分野となり、その方法も結論も門外漢にはわかりにくい。データを集めたり仮説を検証したり、再現可能で検証可能な結論を求める点で、人文科学よりも自然科学に近い。これもまたフンボルトの遺産である——といってもそれはチョムスキーが理解していたフンボルトであり、今日、理論的な著作を通してのみ知られているフンボルトである。それは、より幅広い経験主義的な取り組み——世界中の多くの言語共同体についての文化的歴史的な文脈や、美的道徳的判断や、知的哲学的文学的成果にまで及ぶもの——をすべて剥ぎ取られたフンボルトである。現代の学界に著しく欠けているのは、フンボルトが畢生の大作を捧げて育もうとした包括的なビジョンであり、地球をまるごと取り囲むような野心である。今日、フンボルトを突き動かした数々の疑問は、いくつものサブフィールドに分散している。言語学はとくに自ら進んで孤立し、言語と文化に対するすべての学問分野から徹底的に切り離されている。我々はこの状況を変えなければならない。

私は単に時間をさかのぼってフンボルトの研究を、彼がやり残したところから再開しようといっているのではない。フンボルトはたしかに言語が人間の精神のなかでどのように作用するかについて、多くの法則を発見した。しかし彼のもっと大ざっぱな憶測——たとえば屈折語は知的作用において優れているといった主張など——は、控え目にいっても風変わり、もっとはっ

きりいえば不快である。そのような憶測は、150年にわたる言語学の研究によって、ほとんど誤りであることが証明されている。もちろん、フンボルトの見解をもっと穏やかにしたもの、つまり異なる言語は異なるやり方で「考える」という説は、最近一部の認知科学者のあいだでふたたび注目を集めてはいる⁴⁴⁾。

しかしそんなことより、むしろ我々の研究とフンボルトの研究が大きく乖離しているからこそ、今日フンボルトの研究の全貌を注意深く再現することに意味があるのだ。もしも我々が、フンボルトの打ち捨てられた著作や原稿の残骸にひそむ壮大な知の殿堂を再建することができたら、それをあらゆる側面から調査してその土台となる構造を把握することができたら、そしてフンボルトが世界の言語と文化に関する自らの知識をしまいこんだ部屋のひとつひとつに入ることができたら、我々は彼の偏見を認めながらも、その熟練の技を満喫することができるだろう。

そうすることによって我々は、全世界を——フンボルトの時代、文化や精神をのぞきみる窓であった言語の世界を——斬新な観点からみることができよう。学問分野が専門化した世界は、フンボルトが産み出した知の申し子たちから我々が受け継いだものだが、その世界は開放性や柔軟性、地球的視野や大きな問題意識を失ってしまった。それらはすべて、フンボルト自身はまだもつことができたものなのだ。フンボルトの研究は我々がそういったものを取り戻すための創造的刺激を与えてくれるはずだ。今日、人文科学の各分野は、どれもが独自の方法で、言語と文化と精神のもつれた謎を解きほぐそうとしているが、たがいに張り合うばかりで、共通の理解のもとに集結することはない。おかげでどの分野でも、現代の差し迫った課題——たとえば学問的研究の断片化の進行、グローバル化の破壊的影響としての西欧の文化的支配、人間の本质を解明する権利を人文科学者から奪おうとしている一部の認知科学者たちの脅威——に立ち向かうことがますます困難になっている。フンボルトの時代にはたしかに多くの偏見や盲点があったが、これらの課題をみると、我々も当時とはまた異なるが、同じくらい大きな偏見にとらわれていると考えざるを得ない。フンボルトの知的世界に注目することで、我々は少なくとも、自分たちの知の世界になが欠けているのか認識し、誤りを正すことができるだろう。

注

- 1) Steven Pinker, *The Stuff of Thought: Language as a Window Into Human Nature* (New York: Penguin, 2007).
- 2) Noam Chomsky, *Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought*, 3rd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 2009 [orig. 1966]).
- 3) 世界の言語に関するフンボルトの調査研究については、クルト・ミュラー＝フォルマー (Kurt Mueller-Vollmer) によって包括的に資料化されている。ミュラー＝フォルマーは第二次大戦中に散逸したフンボルトの言語学関係の遺稿を再発見した。ここではとくに以下の文献を参照。Kurt Mueller-Vollmer, *Wilhelm von Humboldts Sprachwissenschaft. Ein kommentiertes Verzeichnis des sprachwissenschaftlichen Nachlasses* (Paderborn: Ferdinand Schöningh, 1993).
また、フンボルトの人脉や情報源に関しては以下の文献から豊富な知識が得られる。Georg Reutter, *Kosmos der Sprachen: Wilhelm von Humboldts linguistisches System* (Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2011)
- 4) Wilhelm von Humboldt, "Notice d'une grammaire Japonaise imprimée a Mexico" (1825) in *Wilhelm von*

Humboldts Gesammelte Schriften, ed. Albert Leitzmann, vol. 5, 1823-1826 (Berlin: B. Behr's Verlag, 1906), 237-47.

- 5) "Nach mündlicher Vernehmung einer aus Oiwaihi mit dem Mentor gekommenen jungen Menschen," n.d., Coll. ling. fol. 34, Bl. 25-27, Nachlaß Wilhelm von Humboldt, Biblioteka Jagiellońska, Cracow (この文献は以下『フンボルト遺稿 (Humboldt Papers)』と記す)

ベルリンのフンボルトの論文のデジタル化文書は現在進行中のデジタル化プロジェクトの一環として作成されたものだが、そこへのアクセスについては、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーのウーテ・ティンマン博士 (Dr. Ute Tintemann) のご厚意にあずかっている。

- 6) Jared Diamond, "Taiwan's Gift to the World," *Nature* 403 (17 February 2000): 709-10; K. Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar* (New York: Routledge, 2005), 1, 6-7, 26-29.

元となる論文はこちら。Robert Blust, "Subgrouping, circularity and extinction: some issues in Austronesian comparative linguistics," in *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, ed. Elizabeth Zeitoun and Paul Jen Kuei Li (Taipei: Academia Sinica, 1999), 31-94.

- 7) フンボルトはマレー・ポリネシア語族という用語を造ったとよく誤解されているが、じっさいはこの言語グループを表すのに「マレー語族」という言葉を使うことが多かった。しかし現在および19世紀後半の一般的な用法を考慮して、筆者は「マレー・ポリネシア語族」という用語を使用する。

- 8) William Marsden, "Remarks on the Sumatran Languages, by Mr. Marsden. In a Letter to Sir Joseph Banks, Bart. President of the Royal Society," *Archaeologia: Or Miscellaneous Tracts Relating to Antiquity* 6 (1782): 154-58.

- 9) 前掲書 (注 8) Marsden, "Remarks," 154-55.

- 10) John Crawfurd, *History of the Indian Archipelago: Containing an Account of the Manners, Arts, Languages, Religions, Institutions, and Commerce of its Inhabitants* (Edinburgh: Archibald Constable & Co., 1820).

- 11) William Marsden, *History of Sumatra, Containing an Account of the Government, Laws, Customs, and Manners of the Native Inhabitants, with a Description of the Natural Productions, and a Relation of the Ancient Political State of that Island* (London: n.p., 1783). この本は何度も版を重ねているが、フンボルトが持っていたのは1811年版である。

- 12) 前掲書 (注 10) Crawfurd, *History*, 2:21; cf. 2:7-9.

- 13) クローファードの言語に関する理論は前掲書 (注 10) 参照。Crawfurd, *History*, 2: 15, 43-46, 78-86, 94-108.

- 14) フンボルトはこの言語グループを指して「インド語派 (サンスクリット語派)」という用語を用いたが、筆者は注 7 で「マレー・ポリネシア語族」について説明したのと同じ理由から「インド・ヨーロッパ語族」という用語を使用する。

- 15) Indra Sengupta, *From Salon to Discipline: State, University, and Indology in Germany, 1821-1914* (Heidelberg: Ergon Verlag, 2005), 18-27; Salomon Lefmann, *Franz Bopp: Sein Leben und seine Wissenschaft* (Berlin: G. Reimer, 1891-7), 1:79-82, 102-4.

フンボルトが最初にシュレーゲルをベルリン大学に引き抜こうとしたいきさつについては以下の文献を参照。Albert Leitzmann (ed.), *Briefwechsel zwischen Wilhelm von Humboldt und August Wilhelm Schlegel* (Halle: Max Niemeyer, 1908), 3-5.

- 16) Peter K.J. Park, "A Catholic Apologist in a Pantheistic World: New Approaches to Friedrich Schlegel," in *Sanskrit and "Orientalism": Indology and Comparative Linguistics in Germany, 1750-1958*, ed. Douglas T. McGetchin, Peter K.J. Park, and Damodar SarDesai (New Delhi: Manohar Press, 2004), 83-107, esp. 92.

もっと一般的な傾向に関しては以下の文献を参照。Douglas T. McGetchin, *Indology, Indomania, and Orientalism: Ancient India's Rebirth in Modern Germany* (Madison, NJ: Fairleigh Dickinson University

- Press, 2009).
- 17) Markus Meßling, "Wilhelm von Humboldt and the 'Orient': On Edward W. Said's Remarks on Humboldt's Orientalist Studies," *Language Sciences* 30 (2008): 482-98.
- 18) ここでも他の箇所と同様に、フンボルトの理論的見解は筆者が要約しまとめたものである。フンボルトの無秩序で断片的な記述のなかから彼の思想が明確に表れている部分を特定するのは容易ではないからだ。それでも、このあと紹介するフンボルトの最後の大作『カヴィ語研究序説』から、参考となる箇所をあげておこう。屈折については（孤立語や膠着語についても同様に）以下の部分を参照。Wilhelm von Humboldt, *On Language: On the Diversity of Human Language Construction and its Influence on the Mental Development of the Human Species*（人類の言語構造の相違とそれが人類の精神的発達に及ぼす影響について）, ed. Michael Losonsky and trans. Peter Heath (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), 100-08, 202-07. 原著では以下の部分を参照。Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java, nebst einer Einleitung über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschenschlechts, 3 vols. (Berlin: Königliche Akademie der Wissenschaften, 1836-39), 1:CXXXV-CXLVII, CCXC-CCCII.
- 19) 動詞、とくにサンスクリット語における動詞に関しては前掲書（注18）の以下の部分を参照。Humboldt, *On Language*, 185-91; *Über die Kawi-Sprache*, 1:CCLXVII-CCLXXVI on the verb, particularly in Sanskrit.
- 20) Manuel Brea-Claramonte, "Data Collection and Data Analysis [*sic*] in Lorenzo Hervás: Laying the Ground for Modern Linguistic Typology," in *History of Linguistics in Spain: Historia de la lingüística en España*, ed. E.F.K. Koerner, Hans-Josef Niederehe, Antonio Quilis (Amsterdam: John Benjamins, 2001), 265-80.
- 21) フンボルトと彼の膠着語に関する見解へのデュボンソーの批判については以下の文献の以下の箇所を参照。Peter Stephen DuPonceau, "Translator's Preface" to "A Grammar of the Language of the Lenni Lenape or Delaware Indians. Translated from the German Manuscript of the late Rev. David Zeisberger, by Peter Stephen DuPonceau," *Transactions of the American Philosophical Society* 3 (1830) : 65-96, esp. 77-78. "kuligatschis" に関しては同文献の 82-83 参照。
- 22) 前掲書（注18）Humboldt, *On Language*, 226-29; *Über die Kawi-Sprache*, 1:CCCXXII-CCCXXXVIII on Delaware. フンボルトは最終的に膠着語に関する見解を改め、屈折語との相違をあいまいにするとともに、アメリカ先住民の多くの言語を例にあげて別のタイプ（抱合語）の存在をほのめかした。以下の文献も参照。Paolo Rana, *Linguistic Typology* (Berlin: de Gruyter, 1987), 203-09; and Elke Nowak, "Wilhelm von Humboldt und der 'amerikanische Typus'," in *Diskurse und Texte. Festschrift für Konrad Ehlich zum 65. Geburtstag*, ed. Angelika Redder (Tübingen: Stauffenburg, 2007), 53-64.
- 23) フンボルトの中国語に関する見解については以下の文献を参照。John E. Joseph, "A Matter of *Consequenz*: Humboldt, Race, and the Genius of the Chinese Language," *Historiographia Linguistica* 26 no. 1-2 (1999): 89-148, esp. 104, 107, 120-21, and 139-41.
おもな第一次資料については以下のとおり。Humboldt's "Lettre à Monsieur Abel-Rémusat sur la nature des formes grammaticales en général et sur la génie de la langue chinoise en particulier" (1825-26), in *Gesammelte Schriften*, 5:254-308; Tze-wan Kwan, "Wilhelm von Humboldt on the Chinese Language— Interpretation and Reconstruction," *Journal of Chinese Linguistics* 29 no. 2 (2001): 169-242.
- 24) 前掲書（注17）Meßling, "Wilhelm von Humboldt," 491-93.
- 25) 前掲書（注23）Joseph, "A Matter of *Consequenz*," 140-41.
- 26) Julius Klaproth, *Asia Polyglotta* (Paris: J.M. Eberhardt, 1823), 380-82. クラブロートとアベル＝レミュザはバリのアジア協会で密接に協力しあった。クラブロートが教授職につけたのはプロシア王の資金提供のおかげだったが、それによって彼はバりに滞在しつづけることができた。ドイツ総伝記辞典のクラブ

ロートに関する記載を参照。 *Allgemeine Deutsche Biographie* 16 (1882): 55.

- 27) Alexander Johnston to Humboldt, 7 July 1829 and 24 July 1830, Coll. ling. fol. 53 Bl. 146-50, Humboldt Papers. モーリシャスの同僚とはモーリシャス島総督のチャールズ・コルヴィル (Charles Colville)。フンボルトの娘婿とはガブリエーレと結婚したハインリッヒ・フォン・ビューロー (Heinrich von Bülow)。
- 28) Undated draft of Humboldt's queries for Joseph John Freeman, Coll. ling. fol. 153 Bl. 89-96, Nachlaß Johann Carl Eduard Buschmann, Staatsbibliothek zu Berlin—Preußischer Kulturbesitz. (この文献は以下『ブッシュマン遺稿 (Buschmann Papers)』と記す) 受動態に関する記述は、マラガシ語の文法についてのこの膨大な資料集のあちこちで論じられている多くの文法的な疑問のひとつとして、Bl.91r-92rに出てくる。ブッシュマンはフンボルトの秘書で、フンボルトの言語学に関する原稿はブッシュマンの論文のなかに組み込まれていることが多い。
- 29) Joseph John Freeman to Humboldt, 2 December 1831, Coll. ling. fol. 153 Bl. 129-31, Buschmann Papers; "Antwortschreiben von Freeman auf die 'queries' Humboldts," n.d., Bl. 97-123, *ibid*.
- 30) Thomas Stamford Raffles, *The History of Java*, 2nd ed. (London: John Murray, 1830), 1:414. ラッフルズの『バラタユダ』に関する分析は英語とカヴィ語による抄録とともに同書の以下の部分に見られる。1:458-524.
- 31) Crawford to Humboldt, 16 May 1831 and 28 August 1831, Coll. ling. fol. 53, Bl. 125-30, Humboldt Papers.
- 32) カヴィ語のなかのサンスクリット語由来の単語については前掲書 (注 18) Humboldt, *Über die Kawi-Sprache*, 2:48-62 参照。わかりやすい要約が 55 ページにある。カヴィ語の一般的な特徴については同書の 2:188-203 参照。比較参照は同じく前掲書 (注 18) で以下のとおり。 *On Language*, 15-20; *Über die Kawi-Sprache*, 1:VIII-XVI.
- 33) Letters from 1831-32 exchanged with Godert van der Capellen and Philippus Pieter Roorda van Eysinga in Coll. ling. fol. 53, Bl. 112-19, 207-14, 217-19, 228-33, Humboldt Papers. ファン・デル・カペレンはフンボルトがウィーン会議に出席したときに会った外交官で、フンボルトがロールダ・ファン・エイシンハを捜すのを手伝ってくれた。フンボルトはロールダ・ファン・エイシンハからの情報をたよりに、ドイツ系オランダ人宣教師フリードリッヒ・カール・ゲリッケ (Friedrich Carl Gericke) によって示唆されたジャワ語の動詞についての見解を改めた。
- 34) W. Keith Percival, "Humboldt's Description of the Javanese Verb," in *Studies in the History of Linguistics*, ed. Dell H. Hymes (Bloomington, Ind.: Indiana University Press, 1974), 380-89. パーシバルが取り上げている具体的な動詞の例については以下を参照。 Humboldt to Roorda van Eysinga, 31 July 1831, Coll. ling. fol. 53, Bl. 217-19, Humboldt Papers.
- 35) 前掲書 (注 18) Humboldt, *On Language*, 191-92; *Über die Kawi-Sprache*, 1:CCLXXVI-CCLXXXVIII.
- 36) この副題の訳はピーター・ヒースによる訳と若干異なる。(注 18 参照)
- 37) Franz Bopp, "Über die Verwandtschaft der malayisch-polynesischen Sprachen mit den indisch-europäischen," *Abhandlungen der Königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, philosophisch-historische Klasse* (1840): 171-246, reprinted in *Kleine Schriften zur vergleichenden Sprachwissenschaft. Gesammelte Berliner Akademieabhandlungen 1824-1854* (Leipzig: Zentralantiquariat der deutschen demokratischen Republik, 1972), 235-310. 比較参照文献は前掲書 (注 18) Humboldt, *Über die Kawi-Sprache*, 2:191. このなかでフンボルトはカヴィ語を「劣化したサンスクリット語」とみなすことはできないとはっきり述べているが、カヴィ語を劣化したサンスクリット語とみなす見解はボップによって精巧に練り上げられただけでなく、ウジェーヌ・ビュルヌフ (Eugene Burnouf) やクリスチャン・ラッセン (Christian Lassen) など他の学者によっても支持された。
- 38) 参考文献は以下の通り。 Franz Bopp, *Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung*

mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen, und germanischen Sprache (Frankfurt am Main: Andreäische Buchhandlung, 1816) 後に刊行された同じくポップによる数巻組みの以下の大著も参照。
Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litthauischen, Gothischen und Deutschen (Berlin: Ferdinand Dümmler, 1833-52).

- 39) 前掲書 (注 37) Bopp, "Über die Verwandtschaft," 188-89 (original pagination).
- 40) カヴィ語研究の評判については以下の文献を参照。Kurt Mueller-Vollmer, "Mutter Sanskrit und die Nacktheit der Südseesprachen: Das Begräbnis von Humboldts Sprachwissenschaft," *Athenäum: Jahrbuch für Romantik* 1 (1991): 109-33, at 119-23.
- 41) [August] Zeune, "Australien. Die Maliisch-Polynesischen Sprachen," *Magazin für die Literatur des Auslandes* 21, no. 21 (January 1842): 81.
- 42) [Eduard] Buschmann, "Asiatischer Archipelagus und Australien. Der Malayische Sprachstamm," *Magazin für die Literatur des Auslandes* 21, no. 26 (March 1842): 101, writing of "einer Alles nivellirenden Sanskrit-Liebhaberei" on Bopp's part.
- 43) [Franz] Bopp, review of *Ueber die Verwandtschaft der malayisch-polynesischen Sprachen mit den indisch-europäischen, von Franz Bopp*, in *Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik* 1 (1842): no. 55, 438-40; no. 56, 441-48; no. 57, 449-51.
- 44) Guy Deutscher, *Through the Language Glass: Why the World Looks Different in Other Languages* (New York: Metropolitan Books, 2010); and Lera Boroditsky, "Lost in Translation," *Wall Street Journal*, 24 July 2010. ポロディツキーの記事は、言語相対仮説についての彼女の研究の一般向け要約である。